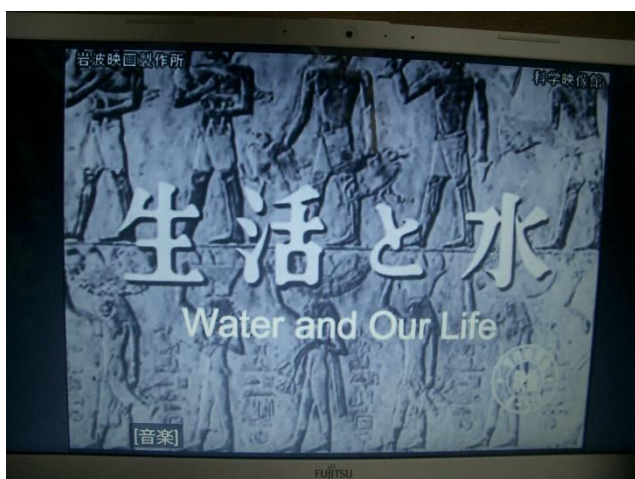


映画「生活と水」の思い出

理事 中西正弘

21世紀水倶楽部の7月21日の講演会は、厚生労働省の元水道課長の石飛博之さんの水道に関する内容で、講演の理解が深まるので、聴く前に「生活と水」という記録映画を見てほしい予告があり、見た人が多いのではなかろうか。



私がこの映画を最初に見たのは、40年ほど前、ある人から「水道の珍しい映画があるから見たら」とビデオカセットテープをもらったときだった。

映画は戦後間もない、昭和20年代、水道行政を所管する厚生省が水道の普及を促進しようと資金を集めて制作したもの。映画監督は巨匠、羽仁進。当時は新進監督。

ある漁港では、男は漁に出るので、水汲みは女子供の仕事。水がいっぱい入った重たい桶を担いで階段を上り下り。また、



汚染された川の水を簡単な装置でこして不衛生なまま利用しているといった状況から、水道が引かれて、野良仕事のあと風呂に入って笑顔の人々が映し出される。

映画製作を担当した当時の厚生省水道課の技官だった内藤幸穂さん（のち関東学院大学理事長）から、ある講演会で当時の話を聞いたことがある。

水道業界の会社に資金援助を頼んでいたら、当時、水道界の“四天王”といわれた東京、横浜、名古屋、大阪市の水道局長から「厚生省が我々に断りもなく金集めをしている」と横やりが入った。しかし、事情を説明すると今度は資金集めに協力してくれるようになった。そして300万円集まったと。

当時、水道建設に協力しようと映写機を持って各地に営業に回ったという業界の人の話を聞いたことがある。だが、水道の普及につれて必要なくなり、幻の映画となっていた。

その後、海外援助を行っている国際厚生事業団が開発途上国の水道事情と同じで、参考になるとして、英語の字幕をつけて利用している。

今は著作権が切れたのか、インターネットのユーチューブで誰でも見られるようになっている。かつて、下水道に関しても似たような記録映画を見たことがある。

東京都下水道局の記録映画だったと思うが、下水道局の職員が結婚しようとお見合いをするが、下水道というイメージからなのか、なかなか決まらない。ところが、あるとき、見合い相手の女性が下水道の重要性を理解して、めでたしめでたしとなったという話だった。一昔前の記録映画は今と違った味わいがあって、興味深く面白い。

2026年度活動報告

水道講演会報告

理事 那須 基

7月21日に開催した水道講演会は、NP021世紀水倶楽部として初めて水道をテーマとした講演会であった。講師は厚生労働省水道課長を務めた経験のある石飛理事で、オンライン参加者66名を含めて総勢97名の会となり、水道への関心の高

さを伺うことができた。

講演の流れは非常に機知に富んだもので、世界の水道の歴史から、現在の水道が抱える課題とその解決方法の提示、これからの水道のメッセージという構成であった。



日本の水道史における大きな転換点は江戸時代である。江戸は十分な地下水を得ることが難しかったため、神田上水や玉川上水などが整備された。明治にコレラなどの水系感染症が大

流行すると、近代水道の建設が開始され、横浜で日本初の近代水道が完成した。

高度経済成長期に人口が急増し水源が不足すると、全国でダム開発が進められた。浄水技術も進歩し、急速ろ過方式が一般的になるとともに、オゾン処理など高度浄水処理が導入され臭気や味の改善が図られた。

その結果、日本の水道普及率は99%を超えた。国民の健康と平均寿命の向上に果たした役割は大きいのである。

こうして整備された水道事業だが、現在の最大の課題は人口減少社会への対応と施設の老朽化である。水道料金の減少や管路の更新、耐震化も重要な課題である。

これらの課題を解決するため、国は広域連携、官民連携、適切な資産管理を掲げている。合意形成などの課題もあるが、水道事業の課題解決に向けて関係者の努力が望まれる。

このような状況の下で、令和6年4月に水道行政は移管された。水道と下水道は整備の進め方や制度、財政支援などの考え方に違いがあるが、人口減少や災害対応など共通する課題が増える中で、上下水道を一体的に考える必要性が高まっている。

移管後は、災害復旧制度の充実、施設強靱化への重点化、広域化支援など、国土交通省ならではの施策が進められている。今後はさらに様々な分野での連携が期待される。

これらの課題は単独で解決できるものではなく、水道事業を支えるためには、利用者である国民の理解も欠かせない。水道事業者には、水道の理解を得る努力が重要になる。

今回の講演は、将来の水道のあり方を考える良い機会となった。上下水道を一体的に捉え、関係者が連携しながら持続可能な水インフラを構築していくことが重要である。

会員だより

徒然水草 其之拾伍 「ワイン街道ほろ酔い旅」

嫌気好気法師

四月初め、知人4人と1泊2日で山梨に出かけた。目的は桃の花とワイナリー巡り。知人の一人、Aさんは様々なワインを楽しみ、海外のワイナリーに行く程のワイン通で、スーパーのワインで満足している筆者は足元にも及ばない。ワイナリー巡りはAさんが先導し、他の4人がぞろぞろついて歩くという道中である。

勝沼ぶどう郷駅に降り立ち、しばし桃の花を楽しんだ後、ワイナリー巡りを開始した。この辺りは言わずと知れた甲州ワインの産地、大小取り交ぜ、約80軒ものワイナリーがある。

ワイナリーに着くとテイスティングだ。ワイナリーによって異なるが、試飲量は大体30~40mL程度なので、ゆっくり味わってもすぐ飲み干せる。とは言え、1か所で4~5種類は試すので、4カ所も回れば、ボトル1本分くらいの量にはなり、酔いが回ってくる。ワイナリーも最初の方では、香りや味の違いをじっくり楽しんでいたが、終わりの方になると、もう何だか違いがわからなくなってくる。

二日間で10軒程のワイナリーを廻り、50種類近くをテイスティングしたが、最も印象深かったのは、あるワイナリーで試飲した白ワインだった。わずか50mLで1,500円と高価だったが、色、香り、味に得も言われぬ気品があり、とても美味しかった。

このワインの説明には「マロラクテック発酵の制御に成功」とあった。マロラクテック発酵、はて？検索してみると、リンゴ酸を乳酸に変換する微生物反応で、この発酵でワインは丸みがあり、ふくよかな口当たりになるらしい。最近のワイン職人は、大学で発酵工学を修め、海外でワイン醸造について研鑽した人も多く、もう、昔ながらの経験と勘にたよる時代ではないようだ。

ワイナリーによっては、醸造工場を見学させてくれるところもあり、面白い体験だった。我々5人はいずれも、嘗ては水処理を生業としていた(いる)人間ばかりなので、工場では、皆、醸造タンクや制御装置、補器類、遠心分離機等に異常な食いつきを示し、ガイドさんに「この人たちは一体何者なのだろう？」と不審な目で見られてしまった。

さて、この旅で味わったワインは、それぞれに個性豊かな香りと味だったが、筆者の得た学びは、「高いワインほど美味しい」といういささか情けないものだった。これでは、Aさんのようなワイン通になるのは到底無理そうなので、「ワイン道」を究め

るのは諦め、最近はレモンサワーばかり飲んでいる。「レモンサワー道」ならば究められるだろうか？

編集幹事のあと整理

- 石飛理事の水道講演会に関して、巻頭文で中西理事がその予習ビデオに関連し、また当日の報告が那須理事から、それぞれありました。
- 折しも、2026年熊本地震。7月28日16時27分M7.1最大震度7。今回も上（下）水道の復旧遅れが問題に？とくに水道の復旧がほかのインフラに比して熱望されているのは前々からだ。それにしてはなぜ復旧がいつも遅れるのか理由がいまひとつわからない。耐震化なども長期には必要だが、災害後の応急復旧などでも一層の迅速化が求められる。
- 村上嫌好法師からの其之拾伍。山梨ワインは編集幹事子も愛好して、若き頃は一升瓶に詰められた赤ワインを一晩で家族とともに飲み干したものです。最近は文中にある白ワインを世界に求めています。白はバリエティと深みがありますね。

- 6月の通常総会報告は執筆者都合により、次号以降の掲載となります。お待ちください。
- 会員日よりコーナーへの投稿を募集しています。投稿はいつでも受け付けます。直近の号に掲載します。投稿要領などは望月から毎回お出ししている原稿依頼メールをご覧ください。

編集幹事・望月



[サバ川](#)@ベオグラード<セルビア(この写真の右先でドナウ川本川に合流する)>